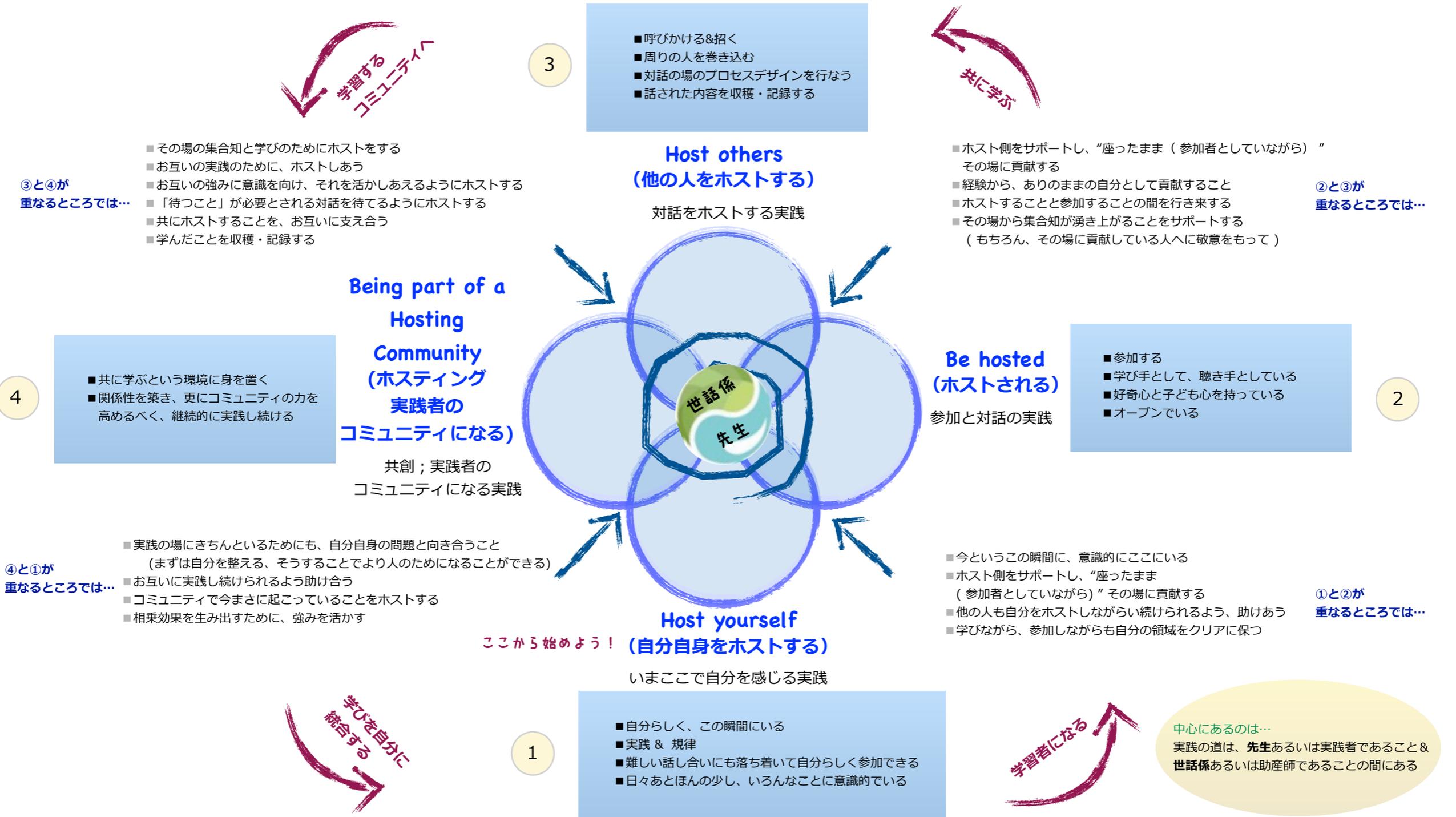


# 4つの実践

今、まさにこの瞬間にいること、対話に参加し、その場に主体的に関わること、話し合いの良きホストであること、そして共創すること。4つの実践は分かりやすいスキル、そして日常での実践方法ですが、これらを磨いていくには継続的な実践がかかせません。ここで言う「実践」、とはスキルや能力を維持、または高めていくために、主体的に継続して何かを行なうことを指しています。

まず、「今、この瞬間にいること」や、「大切な話し合いに主体的に関わる」という実践を重ねることで私たちは「学習者」となり、それによって多くの可能性が開かれていきます。そして、話し合いのホストを行い、他のホストや実践者とのつながりはじめること、私たちは学習者あるいは実践者のコミュニティに育っていきます。コミュニティになることで、個々の学習者としてよりも、もっと大きな可能性を体現していけるはず。このような学習者、実践者の集まったコミュニティが、集合知に踏み込める、真の“学習するコミュニティ”であり、相乗効果の発揮や創発を起こすのです。



もしアート・オブ・ホスティングが、自分とその周りで起こっていることを直視する力を自分に見出し変化を恐れずにいるように人を変える方法だったら？  
もし様々な手段方法が、人は誰でも賢く変化することができるということに気づいてもらうための口実だとしたら？

## 4つの実践の詳細

3

…勇気を出して、大切なことを話す場をつくり人をよぶこと—パワーのある問いを見つけ関心を持つ人たちと対話すること—そして、気づき、パターン、学び、英知に基づくアクションを収穫すること…

対話の場をもてなすというのは、ファシリテーション以上のもでもあり、それ以下のものでもあります。それはリーダーシップのとり方のひとつであり、人が最高の形で協働するための「器」をつくり支えることを意味します。

この器をつくる手始めにセブン・ヘルパーズ(※)が役に立ちます。もちろん、それをその場で行うこともできますが、準備を整えるに越したことはありません…そして、最善の準備は、全身全霊でその場に在ることです。また最低でも、集いに対するニーズを理解し、目的を明確にすること、対話のきっかけとなる良く練られたパワーのある問いを準備し、対話の成果をどう収穫し、収穫した成果をどうするのか分かっていることで、成果の永続性を保ち対話をした価値を感じられるようにすることができます。

対話の場をもてなすのは、勇気があることです。また来る人に対する確信と信頼も若干求められます。場をもてなすことへの恐怖心から、対話の場を軽視してしまうこともあります。ですが、場に人をもてなすということは贈りものであり、良い場に招かれるということまた贈りものなのです。

※：いま・ここに在ること、良い問い、トーキングスティックを使うこと、成果を収穫すること、英知ある決断をすること、行動すること、共に在ること (<http://www.artofhosting.org/wp-content/uploads/2012/10/Hostinginahurryversion1.5ChrisC.pdf> より)

生きたシステムは・・・  
自己組織する

4

…人と共につくり共に場をもてなすこと、互いの知識、経験、実践していることを融合し、協働すること…

四つ目の実践は、傍観することなく対話の場に参加し、成果を持続的なものにするための取り組みに貢献すること。最高の対話は、みんなが場の真ん中にあるもの、コラボレーションの中心から生まれてくるものに耳を傾けるときに現れます。それは、個人個人の利害を調整することではなく、新しい何かを見出すことです。それが見つかったとき、みんながどのように課題に貢献できるのか明らかになったとき、取り組むべきことが自然に見えてくるのです。

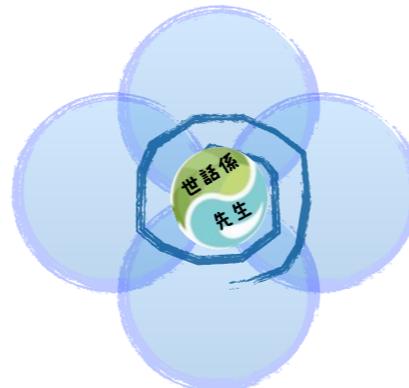
共に創っていると心から感じられるとき、誰が何を言い貢献したのかは関係なくなります。互いの知識を積み上げること、そして部分の総和より全体が大きくなることで、得られる相乗効果とインスピレーションこそが宝ものなのです。こうして—良い対話、協働する友人同士から生まれる関係性のネットワークに成果が根付くことで—時間をかけて成果が永続的なものになっていきます。協働する場からは、思いもよらなかった驚くような成果が生まれてくることのできるのです。

「場」をもてなす

Host others

Being part of a  
Hosting  
Community

場をもてなす人の  
コミュニティになる



Be hosted  
「場」に参加する

Host yourself

「場」に在る

…判断やすでに答えは知っているという思いを手放して、全神経を集中し相手を尊重しながら聞くこと—マインドフルな対話をする…

「対話」とは、ひとつの妙技です。単に話すこととは異なるものです。お互いに注意を払って傾聴すること、そして全体に貢献できることをすることが求められます。好奇心と判断は、同じ場で同時に存在することはできません。耳から入ってきたことを判断すると結果に好奇心を持つことができなくなります。先行きが不透明だからこそ対話の場を設けるのなら、オープンであることはとても大切なスキルであり能力です。技ある対話を通じてのみ、最善策を共に見つけることが可能となります。

マインドフルな対話を実践すると、ミーティング中の時間がゆっくりと流れ英知と明瞭さが素早く発揮されるでしょう。惰性的に話しをするときは、お互いに傾聴することも明瞭さが生まれる余地が生まれることもないでしょう。対話の妙技とは、効率を上げるために敢えてペースを落とすことと言えます。

生きたシステムは・・・  
進化する

生きたシステムは・・・  
創発する

ここから始めよう！

1

…まずは自分から—カオスに進んで向き合い—自分の中に「余地」を残す、あるいは可能性にオープンであること—「いま・ここ」という火中に在ること…

「いま・ここ」に在るとは、集中し、整った状態で、自分のニーズとどう貢献できるかが明確になった状態で、場に現れること。それは、自分自身とつながり、参加する集まりの成果について興味と関心を持つという態度を育てること。

「在る」とは他者と協働することに専念するために自分の中のスペースと時間を確保すること。気がそがれていたり、呼び出されたり、意識が他の場所に飛んでいると、全身全霊でその場にいることはできません。集まりにおいて深遠な成果が生まれるには、その場にいるひとりひとりが完全にその場に在ることが必要です。

いま・ここに在るとは、自分の周りの環境、その場にいる他の人々、自分がどんな影響を受け、周りにどんな影響を及ぼしているのかも意識されているということ。はじめの挨拶、趣旨の共有、話されるテーマやタスクについて全員の声聞くことによる「チェック・イン」、あるいはシンプルに短い沈黙の時間をとることで、集いの始まりに皆んなで「いま・ここに在る」ようにするのが効果的です。その場の全員でペースを落とすことで、全員が一つの集団として共にいま・ここに在ることができます。

生きたシステムは・・・  
秩序と混沌のあいだ  
を踊るように揺らぐ